

## 南進の「聖地」昭南の成立

### — 戦時下における高丘親王顕彰と戦跡巡拝 —

大 平 晃 久

The Sacred Island 'Syonan' or Singapore  
under the Japanese Advance to the South-East Asia

Teruhisa OHIRA

#### I はじめに

第二次世界大戦中、日本軍政下のシンガポール＝昭南は、「大東亜共栄圏」建設の軍事的かつ政治経済的な拠点であるばかりでなく、南進の文化的・精神的な拠点をなす「聖地」としてつくり上げられつつあった。その「聖地」化は二つの面からなる。その一つは、高丘親王中心の「聖地」化であり、もう一つが直近のシンガポール攻略戦の戦跡「聖地」化である。

高丘親王（眞如法親王、高岳親王、799年～865年?）は、仏道修行のために天竺渡海の途上、シンガポール付近で死去したとされる人物で、シンガポールと日本との精神的かつ歴史的なゆかりを強調するために戦前には広く注目を集めていた。「大東亜共栄圏」・南進を正当化するために親王の存在が利用されたことについては、矢野暢<sup>1)</sup>や佐伯有清<sup>2)</sup>などによってこれまでも指摘されている。また大澤広嗣は、仏教界の動向を中心に戦時中の親王の顕彰について詳細な検討を行っている<sup>3)</sup>。

一方、シンガポール＝昭南には、1942年2月の陥落直後から、昭南神社のほか、忠霊塔などいくつかのモニュメント<sup>4)</sup>の建設が進められた。さらに、一時的とはいえ、それらモニュメントを訪れる戦跡巡拝が行われている。

本稿では、日本の近代期の対外意識の「記憶の場」、すなわち、対外的な記憶に強く結びつけられた場所の一つとして、シンガポールに着目する。そして、シンガポール＝昭南における二つの面からなる南進の「聖地」化が、それぞれどのように構想され、現実化したか、またそこに「記憶の場」としてどのような特徴があるか考えたい。

#### II 高丘親王中心の「聖地」化

(1) 親王への注目 高丘親王は、799年に平城天皇の第3王子として生まれた。嵯峨

1) 矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社、1979、188頁。

2) 佐伯有清『高丘親王入唐記—廃太子と虎害伝説の真相』吉川弘文館、2002。

3) 大澤広嗣「第二次世界大戦下の仏教界と南進—眞如親王奉讃会とシンガポール」仏教文化学会紀要19、2011、105-132頁。

4) 記念碑・慰霊碑のほか、記念建造物（例えば昭南神社）も含めて「モニュメント」とよぶ。

天皇の皇太子に立てられるものの葉子の変(810年)で廃され、出家して眞如と名乗る。空海に師事し、唐に渡った(862年)のち、天竺を目指して渡海し(865年)、その途上、羅越国で死去したとされる。入竺を企てた皇族として早くから注目された。

明治以降、高丘親王の入竺ルート、死去地に関心が向けられる。死去地の羅越国を現在のラオスとする説は1880年頃から北沢正誠(東京地学協会幹事)<sup>5)</sup>によって唱えられた。その後、桑原鷲藏(京都帝大教授・東洋史)<sup>6)</sup>によってシンガポールを含むマレー半島南部説が出され(1908年)、学界で定説化する。

1923年には新村出(京都帝大教授・文献学)<sup>7)</sup>によってシンガポールに高丘親王の記念碑建立が提唱された。新村は「例へば日本領事館の域内とか、或は寧ろ公園や博物館などの衆目を惹く地帯とかに建てる様に致したいと云ふ案を持つてゐる」<sup>8)</sup>とその構想を語っている。ただしこれは植民地当局から許可を得られない見通しになり頓挫している<sup>9)</sup>。羅越国故地はシンガポールではなく北のジョホールであるとする説も根強く、杉本直治郎(広島文理大教授・東洋史)は親王記念碑について、ジョホールバルの「小高き処で、旧海峡に面した然るべき地点」、「Sultanの宮殿が建てられてゐる、パルミエ類の植え込みを持つた美しい外苑内にこれを建設する訳には行かぬものであろうか」と具体的に述べている<sup>10)</sup>。さらに1937、38年頃には次善の策としてバンコクへの建碑を目指す動き<sup>11)</sup>もあった。

(2) シンガポール陥落と親王顕彰 1942年2月のシンガポール陥落は高丘親王の顕彰に変化をもたらした。第79回帝国議会(1941年12月～42年3月)では親王に関する1件の建議、2件の請願が行われた。シンガポール陥落直前の2月13日には、「畏クモ「シンガポール」附近ニ於テ薨去アラセラレシ高岳親王ノ尊靈ヲ其ノ聖地ニ奉祀シ以テ大東亜建設ノ中心的靈地タラシメラレムコトヲ望ム」とする「高岳親王ノ尊靈ヲ『シンガポール』ニ奉祀ニ関スル建議」が衆議院建議委員会でも可決されている<sup>12)</sup>。

同時に、高丘親王のモニュメントについて様々な案が出されることになる。仏教(真言宗)界においては(親王の死去地について)「多分の意向もジョホール州の辺といふにあるやうであるから、今は一切の異説の討論を打ち切りて新嘉坡港と決定し、一日も早くその御遺跡に御記念碑なり御銅像なりを建設して御遺烈を御顕彰し、尊靈を御慰め奉るべき

5) 石村貞一編『護法賢聖伝二編』令知会、1887、24頁。なお、著者の北澤は外務省で竹島問題にかかわったほか、小笠原島司なども務めた興味深い在野の地理学者である。

6) 桑原鷲藏「入竺求法の僧侶(承前)」燕塵11、1908、6-9頁。

7) 新村出「眞如親王の記念と新嘉坡」歴史と地理12(3)、1923、260-271頁。

8) 新村出「眞如法親王の記念碑を新嘉坡に建つるの議」(新村出『史伝叢考』楽浪書院、1934(初出1925))29頁。

9) 「仏教連合会は既に外務省及宮内省へ交渉したりと云ひ、宮内省また考量しつゝ、ありと云ひ」とある。「眞如親王の建碑問題一世論一東」六大新報1099、1925、11頁。また、英国大使館へ内々に意向を問うた結果は「要塞地なれば建碑は許し難し」だったという。宮崎忍海「眞如法親王と昭南島御建碑」六大新報1961、1942、5頁。

10) 杉本直治郎「羅越國問題」(樺溪会編『山下先生還暦記念東洋史論文集』六盟館、1938、390頁。

11) 教育運動家で仏教学者の浅野研真を中心とした運動。水原堯榮「眞如法親王を偲び奉る」六大新報1961、1942、7頁。

12) 小池四郎・大岩 誠『高岳親王の御事蹟』日本南方協会、1942、34-38頁。

である」<sup>13)</sup>との極めて積極的な見解も示された。

仏教界におけるこの時期の高丘親王顕彰案を検討しよう。上述の第79回帝国議会における真言宗を中心とした「真如法親王御遺蹟調査並御偉業顕彰ニ関スル請願」（衆議院、貴族院の計2件）では、記念碑と寺院の建立があげられていた<sup>14)</sup>。それが曲折を経て、1942年5月13日の高丘親王奉讃準備会第1回会合では、天照大神を祭神とする神社、「大東亜戦争に於ける護国の英霊を祀る忠霊塔」、「超宗派的仏教文化会館」である「真如会館」の建設が提案されている<sup>15)</sup>。明記されていないが、高丘親王はこの神社に合祀されることになっていたのだろう。

この案が興味深いのは、シンガポール＝昭南における日本の国家的な記憶装置を、高丘親王の名を冠した計画の下、仏教界が主導してつくり上げようとしている点である。すなわち、親王を中心に、「聖地」昭南を形成しようとする仏教界の欲望が示されている。長らく続けられてきた親王顕彰の経緯をみるなら仏教界にとってそれは当然のことであっただろう。

しかし、この1942年5月には、すでに昭南神社の造営が始まっていた。管見の限り、4月14日には昭南神社、忠霊塔などの造営を伝える新聞報道もある<sup>16)</sup>。高丘親王奉讃準備会の案はこれと完全にバッティングしており、修正を余儀なくされることになる。

高丘親王奉讃準備会をもとに、1942年9月には軍官民一体の国民運動を目指した高丘親王奉讃会が発足<sup>17)</sup>、翌1943年5月に真如親王奉

表1 シンガポール＝昭南と高丘親王を  
関連づける記述を含む文献数

時 期	文献数
明治期	1
大正期	10
1927～35年	6
1936～41年	11
1942年	58
1943年	18
1944年	3

ジョホールやマレー半島南部に関するものを含む。また新聞、雑誌無署名記事は除く。

讃会に改称された。高丘親王の顕彰碑、仏教文化会館、寺院の建立が目論まれたものの、具体的な進展は見られなかった。唯一の具体的な整備案とよべるのは、奉讃会常任理事の長井真琴（東京帝大教授・仏教学）による「浄域は昭南島の植物園或は大学等の旧設備を利用」<sup>18)</sup>という提案のみである。この他には大仏然とした高丘親王像の建設も報道されたが<sup>19)</sup>、建設地は未定であった。

奉讃会以外の高丘親王関連の活動をみると、上述の杉本がシンガポール島南部、カニング要塞の「禁ぜられたる丘」を親王の墓、ラッフルズ博物館にある（現在では「シンガポール・ストーン」

13) 蓮生観善「真如法親王を讃へ奉れ」六大新報1961、1942、3頁。

14) 「真如親王御遺蹟調査と御偉業の顕彰 真言宗総大本山住職が帝國議會に請願」六大新報1960、1942、12頁。

15) 「高丘親王奉讃準備會成立」六大新報1974、1942、8頁。

16) 「昭南神社の御造営」、東京日日新聞1942年4月14日夕刊。もう1か所、ジョホール水道敵前渡河戦闘記念碑の建設も含まれている。

17) 会長は細川護立（侯爵、貴族院議員）、理事長は予備陸軍少将で中国情報工作に長く従事した松室孝良であった。

18) 長井真琴「高丘親王を偲び奉りて」新亜細亜16(2)、1943、69-71頁。

19) 「昭南市に建つ御尊像／御遺徳を偲び奉り心血の制作」、朝日新聞1943年1月22日夕刊。

とよばれる)石片を親王墓碑ではないかとする説<sup>20)</sup>を提示しているのが目を引く程度で、ほとんどみるべきものはない。

(3) シンガポール=昭南に関する語り シンガポール=昭南と高丘親王を関連づけた記述を含む文献は、表1に示したように、徐々に増加し1942年に急増している。それらの中に多くみえるのは、時局に迎合した「南進の先駆者」としての高丘親王像である。例えば、新嘉坡日本人倶楽部によるシンガポール案内書(1939年)は、冒頭で「虔みて本書を開南の大先達 真如法親王の英霊に捧げ奉る」とうたい<sup>21)</sup>、上述の杉本は、高丘親王を「とこしへに南方圏の守りとならせられてゐる」「南進の先駆」と描写し、「この御精神を御生かし申し、大東亜共栄圏の一環としての南方共栄圏を確立致しますことこそ、お互い皇国民のつとめではありますまいか」と語りかけた<sup>22)</sup>。

こうした高丘親王に関する語りについては、上述したように、1935年以降の暴力的な南進の時期に「過去の歴史の美化=ロマン化の必要に迫られたあげく、高丘親王や山田長政など、いくにんかの『南進』日本人を発掘して、スターとして祭り上げ」たことが矢野によって指摘されている<sup>23)</sup>。

さらに、1942年のシンガポール陥落後になると、「シンガポール即ち昭南島が完全に日本の手に帰したことは…何か真如法親王の御魂が皇軍をお導き下すつたといふやうな感じがしない訳けには行かない」<sup>24)</sup>といった「皇軍を招く」高丘親王像が加わるようになる。

このように高丘親王が南進の「スター」化するとともに、シンガポール=昭南という場所も、親王に関わる「聖地」として表象されている。そのなかでまず目立つのは、まさに「聖地」という表現を用いて、シンガポール=昭南を親王と関連づけて語るものである。例えば次のようなもので、6例ほど見出せる。

皇軍の神速な戦果によつて新嘉坡は日本の手に帰し、昭南島と命名せられた。数千年の昔眞如親王がこの地に足跡を印し給はつたのみでなく、遂には此処を墳墓の地とせられた。昭南島は眞如親王の聖地である。／この地に一大記念碑を建設して、南方文化工作の基地とすることは親王を顕彰する上に於て最も意義のあることであると考へる。／眞に親王の霊が東亜共栄圏の確立に邁進する我が同胞に強い精神的の糧を賜はり、更に進んで、十億アジア民族の文化活動の源泉とならんことを念願して止まない(久野芳隆、台北帝大教授・仏教学)<sup>25)</sup>。

こうした「聖地」という用例の多くは上述の衆議院における建議で「聖地」という用語が使われたことの影響かもしれない。ただし、建議においては高丘親王の死去地を指して「聖地」と称されていたのが、シンガポール全体へと拡張している。

20) 杉本直治郎「高丘親王と昭南島」興亜教育1(6)、1942、90-101頁。なお杉本は奉讃会評議員。

21) 新嘉坡日本人倶楽部編『赤道を行く—新嘉坡案内』新嘉坡日本人倶楽部、1939。

22) 杉本直治郎「眞如親王を偲び奉る」(熊本中央放送局編『南方事情』熊本中央放送局、1942)50-55頁。

23) 前掲1)。

24) 新村出「眞如法親王を讃仰し奉りて」六大新報1964、1942、3頁。

25) 久野芳隆「眞如親王と古代南方文化」密教論叢22・23、1942、120頁。

「聖地」という表現は必ずしも用いなくても、高丘親王の存在によってシンガポール＝昭南を「聖地」ととらえる文章は多い。そのなかから以下の2種類の語りを取り上げたい。

その一つは、イギリスから奪還すべきだった地としてシンガポール＝昭南を描くものである。西村真次（早稲田大教授・民俗学）による「英領マライは…更に千有余年前に於ける法親王薨去の遺蹟として、これをイギリスの蹂躪に任しておくことの出来ない日が来た」<sup>26)</sup>、上述の長井による「親王の尊霊の導きによるか赫々たる皇軍の成果は正しく聖地の恢復を実現した」<sup>27)</sup>、など、こうした例は多い。このような語りは、上でみた「皇軍を招く」高丘親王像を場所に投影したものといえよう。

もう一つが、南方における日本の文化工作の中心地としてシンガポール＝昭南をみる語りである。上記の久野の文章のほか、大同小異であるが、次のような例もある。

“英霊を昭南島に奉祀せよ” 今や、高丘親王の御事蹟の顕彰を志し、高風を欣慕するの氣運漸く高く大きく深くなり行き、軍政下の昭南島にその尊霊を奉祀し、その尊霊を中心に仰ぎつゝ新しき大東亜の文化構想を描き、日本文化進出の有力なる基地拠点たらしむることは、親王の御精神を現代に生かすべき臣子我等の重大なる務めである（鈴木善一、民族運動家）<sup>28)</sup>。

これに似たものに、例えば「南方進出の拠点として教化活動の中心道場を建設せん」（蓮生観善、善通寺法主）<sup>29)</sup>のように、高丘親王の死去地を日本仏教の南方拠点としたいとする語りもある。

このように、シンガポール＝昭南は、高丘親王と関連づけることで、イギリスから奪還すべきだった地、かつ南方における日本の文化工作の中心地である「聖地」として位置づけられていた。ただし、それは現実のシンガポール＝昭南とは無関係であるかのように語られる、まさに言説のなかだけの存在であったといえる。つまり、親王のモニュメントの具体的な建設地に関する議論はほとんどみられないままであった。また、高丘親王の顕彰について語られるなかで、すでにシンガポール＝昭南に建設されていた重要なモニュメントである、昭南神社にすらほとんど触れられないことがない。現実を離れた表象だけの世界に高丘親王「聖地」論はあったようである。こうしたことは高丘親王がらみのシンガポール＝昭南の「聖地」表象の最大の特徴といえるだろう。

高丘親王にまつわる「聖地」は全く実現しなかった。しかしながら、この同じ時期にシンガポール＝昭南の日本による「聖地」化は別の形で実現していた。次章では、シンガポール攻略戦の戦跡「聖地」化の経過を追ひ、そのなかに高丘親王との関わりを確認することにする。

26) 西村真次『大東亜共栄圏』博文館、1942、210頁。

27) 前掲18)。

28) 鈴木善一『興亜運動と頭山満翁』照文閣、1942、51頁。

29) 前掲13) 4頁。他に上述の久野による「真如親王の御遺跡を基地として宗教文化工作を行ふことは極めて意味のあることであつて、真如親王が昭南島附近に御足跡を遺された事実を単に過去の追憶として記念するのみでなく、更に将来への宗教文化工作の発足となる様にせねばならぬ」といった文章もある。前掲25) 100頁。



### Ⅲ シンガポール攻略戦における戦跡の「聖地」化

(1) 昭南神社などのモニュメント シンガポールは太平洋戦争開戦直後の激戦地である。1941年12月8日、マレー半島北部のタイ領ソクラーに上陸した日本軍は、1942年2月8日にシンガポールに達し、15日にはイギリス軍の降伏によりシンガポール全土を支配下においた。

シンガポールが陥落すると、日本軍はシンガポール島の中央部、マクリッチ貯水池西端の北岸に昭南神社の建設を進めた。太平洋戦争中、占領地にこれほど大規模で本格的な神社が建設されたのはこのシンガポール＝昭南だけである。昭南神社はシンガポール陥落直後から軍によって構想され<sup>30)</sup>、上述のように1942年4月14日付新聞記事ですでに着工の見通しが報じられている。神社の工事は11月には完了と報じられ<sup>31)</sup>、1943年2月15日に天照大神を祭神として迎え入れる鎮座祭が挙行された<sup>32)</sup>。

昭南神社と同時期に、シンガポール攻略戦で死没した将兵を祀る忠霊塔も建設が始まった。武威山と改称された激戦地ブキ・バト山頂に、イギリス軍兵士に向けられた十字架とともに、1942年9月に完成した<sup>33)</sup>。

このほかにも、シンガポール陥落後、多くのモニュメントが建立された(表2)。昭南神社などこれらモニュメントの一部には、「聖地」との表現もみられる<sup>34)</sup>。数多くのモニュメントが戦闘終結後すぐに建設されたことは、当時、いかにシンガポール攻略が戦局の重

表2 日本軍政下のシンガポール＝昭南の主要戦跡モニュメント

モニュメント	概 要
昭南神社	広大な神苑計画、戦勝記念館が付属。1942年7月30日上棟式、1943年2月15日鎮座祭。
忠霊塔	英軍慰霊碑も付属。ブキ・バト(武威山)山頂。1942年9月10日除幕式。
フォード工場(日英両軍司令官会見記念室)	降伏交渉地、1942年3月までに整備。なお工場自体も観光対象。
菊兵团奮戦之地碑	第18師団(久留米)、マウント・フェバー(ケッペル高地、筑紫山)山頂に1942年3月建立。
鯉城山戦捷記念碑	第5師団(広島)、激戦地の300高地(鯉城山)山頂に1942年7月12日建立。
ジョホール水道 敵前渡河戦跡記念碑	ジョホール側に所在。1942年建立。

これ以外にもモニュメントがある。山下奉文中将の銅像建設も一時進められていたという。「豊功偉業之表彰 山下中将銅像」昭南日報1942年8月22日など。

30) 大澤によれば、山下將軍直々の提案である。大澤広嗣「昭南神社一創建から終焉まで」アジア遊学123, 2009, 150頁。

31) 「昭南の聖地拡張 第二次建設計画決る」大阪朝日新聞1942年7月21日。

32) 「ゴム林と要塞の巢に 生れる日本精神の表徴 二月十五日に鎮座祭 昭南神社」昭南新聞1943年1月1日。

33) “Syonan Memorial To Our Fallen Heroes Unveiled”, *The Syonan Times*, Sep. 11, 1942. 「碧血忠魂永恒表彰・武功偉勲長留史冊 昭南忠霊塔隆重挙行除幕」, 昭南日報1942年9月11日。

34) 「昭南の聖地」アサヒグラフ978, 1942, 18頁。昭南神社, 忠霊塔, 鯉城山戦捷記念碑が取りあげられている。

大な節目と考えられていたかを示していよう。

(2) **戦跡巡拝** これらモニュメントを見て回る「戦跡巡拝」<sup>35)</sup>は、シンガポール＝昭南に滞在した軍人、軍属、在留邦人らによって広く行われていた。戦跡巡拝記やそれに類した文章も多く残されている。

例えば、海軍報道班員として1943年秋にシンガポールを訪れた大野浩亮（日本海事新聞記者）は、昭南神社について、「昭南を訪れるもの全てが、戦蹟巡拝に先立つて、この神社に詣で、敬虔な祈りを捧げ、日本人の感激に涙する」と書き、忠霊塔では「英霊に心からなる感謝と感激の黙祷を捧げ」たことを記す<sup>36)</sup>。さらに新聞記者らしく、フォード工場、ジョホール水道の敵前渡河記念碑まで足を延ばしている。陸軍軍属として1942年12月～1943年1月にシンガポールを訪れた徳川夢声（漫談家）は、陸軍病院に入院中、軍人の案内でフォード工場、ジョホール水道敵前渡河記念碑、筑紫山の菊兵团奮戦之地碑を訪れたことを記した<sup>37)</sup>。また、後日の昭南神社参拝については、「慰問団一同、昭南神社に参拝する。大いに感激した。…」<sup>38)</sup>と書き綴っている。

注目したいのは、こうしたモニュメントを「名所」と表現するなど、戦跡巡拝が観光としてとらえられていることである。「丘の名も筑紫山と改められ、記念碑がたつて、新昭南島名所の一つとなつてゐる」という高島直定（読売新聞記者・海軍報道班員）の文章<sup>39)</sup>、「萬代山、武威山、轟山（は）…昭南島第一の名所になるだらう」という武富邦茂（海軍少将）の文章<sup>40)</sup>は「名所」という表現の見える例である<sup>41)</sup>。また「昭南案内記」と銘打って「（昭南神社は）忠霊塔と共に、昭南へ来る人は先づ足を運ぶべき所」とする語り（北町一郎、作家・陸軍報道班員）<sup>42)</sup>、「新しく出た日本の人達に、どこを観光らしいかなどと、よくきかれたが、昭南神社とか、ブキテマ高地のやうな新しい戦跡地は先づ第一に訪れるべきところである…」との語り（神保光太郎、詩人・陸軍報道班員）<sup>43)</sup>は、いずれも観光が意識されているように思われる。陥落直後でモニュメント建設前の執筆であるが、「昭南特別市遊覧行」として戦跡も含む周遊コースを提示する文章（大内恒、元新嘉坡日本人会長）もある<sup>44)</sup>。戦後の回想まで含めれば、当時昭南特別市の幹部職員であった篠崎護による戦跡巡拝に対する「レクリエーション」との表現、つまり「昭南神社は…山下パーシバル会見のフォード工場、ブキテマの忠霊塔…、久留米第18師団の激戦地であるマウント・フェバー…と共に戦跡見学のコースとなり、市民のレクリエーションの一つ

35) 「戦跡見学」、「戦跡めぐり」という表現もあるが、以下では「戦跡巡拝」とよぶ。

36) 大野浩亮『南の海南の港』亜細亜書房、1944、186頁。

37) 徳川夢声『夢声戦争日記第1巻』中央公論社、1960、226-230頁。1942年12月16日の部分。

38) 徳川夢声『夢声戦争日記第2巻』中央公論社、1960、10頁。1943年1月7日の部分。

39) 高島直定「昭南のぞ記」海運報国2(5)、1942、54頁。

40) 武富邦茂『南方の国めぐり』新潮社、1942、172頁。

41) 戦後の回想でフォード工場が「二つの理由でシンガポールの名所となっていた。一つはもちろん、昭和十七年二月十五日の山下・パーシバルによる英軍降伏の歴史的場所だということであり、もう一つは、近代的自動車工場だったからである」という記述もある。コーナー、E.J.H.(石井美樹子訳)『思い出の昭南博物館—占領下シンガポールと徳川侯』中央公論社、1982（原著1981）、74頁。

42) 北町一郎『星座と花—昭南島現地小説』東成社、1944、283頁。

43) 神保光太郎「昭南、マニラ、サイゴン」大東亜資源2(5)、1943、39頁。

44) 大内恒『南島紀』春陽堂文庫出版、1942。

となっていた」という語り<sup>45)</sup>も見いだせる。

1942年から43年にかけてのシンガポール＝昭南は、日本軍の好戦況によって一時的に落ち着きを見せており、軍人、軍属だけでなく、関係の企業社員など、日本本土から多くの者が渡航していた。陸軍報道班員としてシンガポールを訪れていた佐多稲子（作家）は、戦後に発表した小説「虚偽」の中で当時の状況を「軍人と官吏の間には、家族を呼ぶべきか否や、という問題も提起されるような時期であった」と語っている<sup>46)</sup>。観光が成立するようになりその安定が、それはむしろ日本人にほぼ限定されてのことであるが、一時的とはいえもたらされていたことがわかる。

戦跡巡拝の観光化を端的に示すのが、観光バスの存在である。次の文章は、高級軍属としてシンガポール＝昭南に滞在した都筑等によるもので、1943年8月11日のことである。

戦跡巡りには毎水曜の午後、特別仕立の自動車が出ることになつてゐる。所要時間三時間といふに一人前の料金がたつた五十銭だといふは軍での温い思やりからの企てでもあるらしい。／吾等のバスは午後三時、大東亜劇場の前から二台が前後して出発した。嬉しいことに一つの車に現地人の小娘が一人づゝ附いて、使ひなれた日本語で、戦跡の説明をしてくれる事であつた。／車は直ぐ郊外に走り出て、千代田山、忠霊塔など数々の戦跡を巡ぐつて、昭南神社に來た。神社の境内は素張らしく広いものだつた。…／車はまた走り出した。／「皆さん、こゝは山下將軍と、敵の敗將パーシバルと会見したところであります。車を降りて、この道を行つて下さい。」／と可愛い浅黒い娘が云ふ。／咄嗟に自分は、かつて伊豆半島の遊覧自動車に乗つた時のことを思い出した。…<sup>47)</sup>

都築の文章は、そのあと「筑紫山の戦跡」を回って「戦跡巡り」が終わったこと、同乗者には「一人の女将めいた婦人」や若い女性連れがいたことも記している。公務とは思えぬ同乗者からも、この「特別仕立の自動車」が乗合の観光バスであることは間違いない。

シンガポール＝昭南における観光バスについては、従軍記者であつた津吉英男も「いつのまにか昭南神社やブキテマ会見場、セレタ軍港跡、ジョホールパールのサルタン宮殿などの昭南名所をめぐつて観光バスが走るようになった」と語っている<sup>48)</sup>。ただし、後年の回想であるためか、コース内容の記述は上記の都築の文章とは相違している。

戦跡巡拝とは、それ自体がそれぞれ「聖地」である戦跡をめぐり、戦争の追体験と慰霊を行うことだといえるだろう。そして、戦跡巡拝は、個々のモニュメントを「聖地」としてとらえるだけでなく、巡拝によってそれら「聖地」群を一連のものとしてとらえ、提示する行為に他ならない。すなわち、戦跡巡拝はシンガポール＝昭南を総体として「聖地」

45) 篠崎護「シンガポール占領と『昭南』時代—私の戦中史」（シンガポール日本人会『南十字星—シンガポール日本社会の歩み』シンガポール日本人会、1978）64頁。

46) 佐多稲子「虚偽」（佐多稲子『佐多稲子全集第4巻 私の東京地図』講談社、1978（初出1948））326頁。関連して、次の雑誌記事では、シンガポール＝昭南で結婚したいという語りもみられる。「昭南島に働く日本女性の座談會」婦人倶楽部24(1)、1943、46頁。

47) 都筑等『南方そぞろある記』都筑等、1944、54-55頁。

48) 津吉英男「乱れた軍政」（池田佑編『秘録大東亜戦史6』マレー・太平洋島嶼篇』富士書苑、1954）113頁。



と表象することであるといえる。また、観光化することで戦跡巡拝は量的に大きくなり強化されたといえよう。

そして、このようなシンガポール＝昭南の戦跡巡拝は、旅順のそれを連想させるものである。日露戦争の激戦地である旅順では、1920年代から戦跡を中心とした観光客が増加し、1932年には観光バスの運行が始まり、1933年には『聖地旅順』と題された観光パンフレットが発行されている<sup>49)</sup>。シンガポール＝昭南の観光資源、観光行動ともに旅順に類似しており、シンガポール＝昭南の戦跡を二〇三高地になぞらえた記述もある<sup>50)</sup>。旅順観光を論じた高媛は、満州において「『旅順的な空間』が一つのモジュールのように他の都市にも拡散されていった」と述べている<sup>51)</sup>。これは満州だけでなくシンガポール＝昭南やあるいは他の植民地・占領地の都市にも該当する可能性を指摘しておきたい。

(3) 「聖地」化の競合 本章でここまでみてきたシンガポール＝昭南の戦跡「聖地」化は、前章でみた高丘親王中心の「聖地」化と明らかに競合していた。同じシンガポール



図1 シンガポール＝昭南の戦跡モニュメントの位置

原図は「シンガポール附近詳圖」写真週報206, 1942, 12-13頁, ただし, Pitt, K.W.(ed.), *Memories Unfolded: a Guide to Memories at Old Ford Factory*, National Archives of Singapore, 2008, pp.68-69. から再引用。

49) 高媛「『楽土』を走る観光バス―1930年代の「満洲」都市と帝国のドラマトゥルギー」(小森陽一 ほか編『(岩波講座近代日本の文化史6) 拡大するモダニティ』岩波書店, 2002) 217-253頁。

50) 前掲40)。

51) 前掲49) 232頁。

=昭南について、二つの日本の国家的記憶が正統なる地位を競っていたといえよう。もともと高丘親王は盛んに顕彰されていたにもかかわらず、シンガポール攻略戦の華々しい戦闘の記憶によって圧倒され、戦跡「聖地」化が前面に出ることになった。この競合はただ言説だけではなく、現実のモニュメント整備、観光コース化といった物的な面でも起きていた。現実の物的なレベルでもあったために、高丘親王中心の「聖地」化と戦跡「聖地」化はより激しく競合したといえよう。

たとえ高丘親王の顕彰碑あるいは寺院が実現しても、それは戦跡「聖地」化に付け加えられるモニュメントの一つという位置づけになったことだろう。親王の「聖地」化は戦跡「聖地」化に飲み込まれていたものであり、実際に、昭南神社への高丘親王合祀を求めることは一時検討されている<sup>52)</sup>。ただし、もし親王関係のモニュメントが実現していれば、シンガポール=昭南は、旅順どころではない「聖地」になったかもしれない。

近代、特に太平洋戦争期に、日本の対外進出を美化し賞賛するために、つくられた記憶、利用された記憶は数多い。しかし、開戦後にこのような競合が起り、「聖地」化をなすメインの記憶が交代したかのようにみとれる例は、ここシンガポール=昭南だけではなくだろうか。その意味でも、シンガポール=昭南は、近代日本の「記憶の場」として特筆される場所であるといえよう。

#### IV おわりに

「聖地」のその後をみておこう。終戦の直前あるいは直後に多くのモニュメントは破壊され、わずかな痕跡を残すに過ぎない。ただ、フォード工場のみ、展示施設となつて日英両軍の降伏交渉の行われた部屋が復元展示されている。一方で、高丘親王については1970年にジョホールバル日本人墓地に高野山親王院によって供養塔が建立された<sup>53)</sup>。なお、1970年代には親王ゆかりの遺跡が発見されたとしてジョホールバルで観光開発が目論まれるということもあった<sup>54)</sup>。

本稿では、近代日本の対外意識の「記憶の場」の一例として、シンガポール=昭南を取り上げた。太平洋戦争中のシンガポール=昭南では、高丘親王中心の「聖地」化と、シンガポール攻略戦の戦跡「聖地」化の二つの面から「聖地」化が構想され、昭南神社、忠霊塔などのモニュメントが建設されていた。本稿では、前者の高丘親王「聖地」としてのシンガポール=昭南は全くの言説の中だけの存在であったこと、後者の戦跡については、観光バスが運行されるまでに観光化した戦跡巡拝が行われていたことを明らかにした。そして、この二つの「聖地」化の競合を「記憶の場」シンガポール=昭南の特徴として示した。

植民地・占領地観光の類似性・連続性など、論点の指摘にとどまった問題もある。今後の課題としたい。

52) 「来月総会を開き活潑な実動に入る高丘親王奉讃会会則等成る」六大新報1988, 1942, 10頁。

53) なお、1954年に記念碑建立を求める動きも報道されている。「真如親王の記念碑 各国の協力求めて建立へ」, 毎日新聞1954年11月7日。

54) 葭原幸造「(シンガポールにロマンあり 最終回) 古代の残影と近代国家」三田評論1005, 1998, 56-59頁。